

今週の為替相場見通し(2023年9月19日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		145.91 ~ 147.95	147.84	145.90 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		1.0632 ~ 1.0770	1.0658	1.0550 ~ 1.0800
(1ユーロ=)	(円)		156.58 ~ 158.63	157.61	155.00 ~ 159.00
英ポンド	(ドル)		1.2380 ~ 1.2548	1.2383	1.2100 ~ 1.2500
(1英ポンド=)	(円)	*	182.52 ~ 184.39	183.07	180.00 ~ 186.00
豪ドル	(ドル)		0.6375 ~ 0.6473	0.6431	0.6330 ~ 0.6490
(1豪ドル=)	(円)	*	93.65 ~ 95.55	95.08	94.00 ~ 96.20

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1)今週の予想レンジ: 145.90 ~ 150.00 円

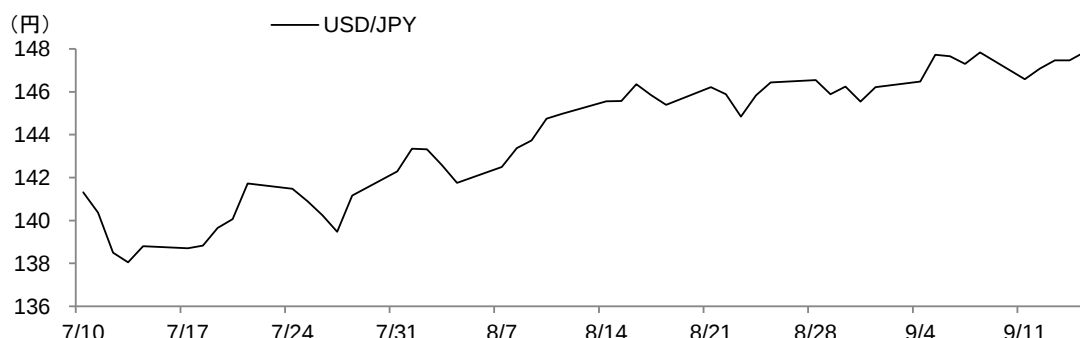
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は147円を挟んだレンジ推移。週初11日、植田日銀総裁がインタビューにて、早期マイナス金利解除の可能性について言及したことが報じられると、政策修正期待の円買いを受け、ドル/円は147.15円付近でオープン。その後、中国当局の元安牽制発言を受けたUSD/CNHの下落も相まって水準を下げると、一時145.91円まで値を下げた。海外時間に入ると米金利上昇とともにショートカバーが入り146円台半ばまで反発。12日、引き続き中国の動向に振られながらも、ドル/円は堅調な日本株や原油高を横目に147円台に乗せた。13日、東京時間は147円台前半で動意乏しく推移。注目された米8月CPIは、コア(前月比)が予想0.2%を+0.1%上回ると、ドル買いで反応し147.77円まで上昇。しかし、総じてインフレ鈍化を否定する内容ではなく、9月FOMCで金利据え置き織り込みが進む中、米金利は低下。ドル/円もドル買いの勢いは続かず、結局、147円台前半を推移。14日、ドル/円は米金利低下を背景に147円台前半に下落。海外時間は、米8月小売売上高や米8月生産者物価指数の強い結果が材料視され、米金利とともに147円台半ばに往って来い。週末金曜日、実需の買いや底堅い米金利に支えられ147.95円まで上昇。NY時間のミシガン大学消費者信頼感指数の結果を受け下押しされたものの、押し目として買われ、147.84円で越週した。

今週のドル/円は確りとした推移を予想。19日(火)、20日(水)のFOMC、21日(木)、22日(金)に日銀金融政策会合を控え、イベントに振られる展開が想定されるが、結局はドル買い地合いと考える。先週公表された米8月CPIは引き続きインフレの鈍化を示しているが、一方でPPIは上振れている。足許、原油が90ドル台を回復し昨年11月以来の高値をつけていることもあり、今後のインフレへの懸念は根強いであろう。労働環境も一時より緩んできたとは言え、引き続き良好と考えられ、米経済への懸念は後退。現時点でFedが引き締めの手を緩める理由に乏しい中、大方の市場予想通り、9月会合は金利を据え置くも、年内利上げ期待を継続するため、ややタカ派な情報発信となるのではないかと。加えて、欧州圏の経済減速懸念が意識される中、消去法的なドル買いはドル/円のサポート材料であろう。波乱含みは日銀会合だが、植田総裁のインタビューをきっかけとして、年明け早々にもマイナス金利を解除するのでは、との思惑が漂っている。展望レポートや物価見通しの公表は来月となるため、さすがに本会合での政策変更は想定していないが、その後の記者会見の内容次第では円買いが強まる可能性がある点には注意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/11~9/15)の値動き: 安値 145.91 円 高値 147.95 円 終値 147.84 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 1.0550 ~ 1.0800 155.00 ~ 159.00 円

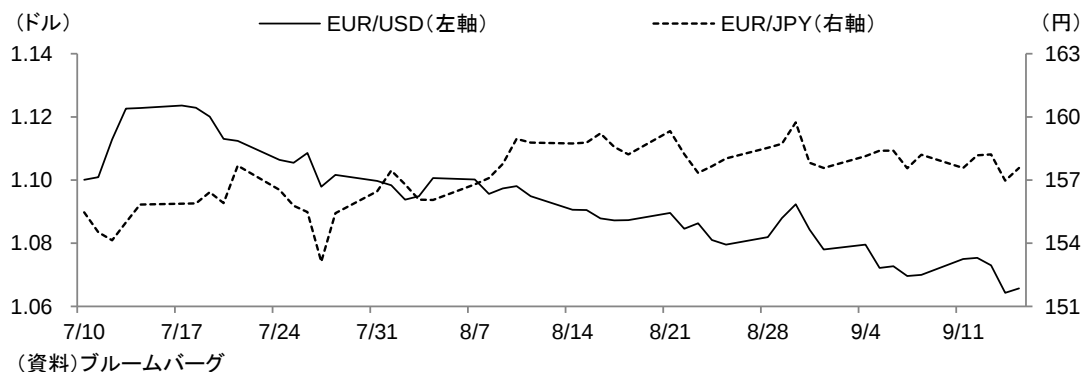
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初11日のユーロは1.0717でオープン。欧州委員会から2023年のユーロ圏成長率見通しの引き下げが発表されたものの、大きな影響は出ず。その他に材料はなかったものの、やや水準を上げ1.07台半ばまで上昇した。12日は東京時間に週間高値となる1.0770まで上昇するも勢いは続かず。1.07台前半まで反落する中で、独9月ZEW調査現状指数が予想比落ち込むも、景気期待指数が予想を上回るまちまちの結果に方向感が出ることなく、1.07台半ばを中心とした値動きに終始。13日は米8月CPIの結果にやや乱高下する中、前日と同水準でのレンジ相場が継続。翌日にECB政策理事会を控えた様子見ムードも強く、値幅は限定的となった。14日はECB政策理事会で+25bpの利上げが実施されたものの、25年のインフレ見通しやGDP成長率の下方修正が材料視され、ユーロが全面安。半年ぶりの水準となる一時1.0632まで下落し、その後の反発も一部に留まった。15日は前日の大幅な下落や米経済指標の結果を受けて、やや反発するも1.06台半ばでは上値重く推移。結局1.0658で越週した。

今週のユーロは引き続き軟調な推移になることを予想する。ECB政策理事会では果敢に利上げを実施したものの、ユーロは大幅に売られる展開となった。単純な金利の水準ではなく、ドイツを中心とした今後の景気後退懸念や声明文、会見内容のハト派転換がより強く意識されたものと思われる。2023年～2024年の総合ベースのインフレ見通しは上方修正されており、引き続き予断は許さない状況ではあるものの、去年は暖冬に救われる形となったが、エネルギー需要が強まる冬季に向けて、資源価格の高騰や供給不足等が欧州圏の経済に影響を及ぼす可能性が再度懸念され始める頃合いであり、こちらも当面少なくともユーロにポジティブにはなれない材料として作用すると考えられる。他方米国は、労働市場の需給緩和やインフレの鈍化傾向も背景に、今週のFOMCでの金利据え置きがほぼ織り込まれているものの、指標から読み取れる経済状況は良好。7月の会合では景気認識を強気に変更している中で、今回更新される今年の成長率見通しも上方修正が十分考えられる状況下、金利の頭打ち感がすぐさま通貨逃避につながる環境ではないと思われる。欧州圏との格差は鮮明であり、ユーロの上値を押さえる要因になるといえよう。今週の主な経済指標として、19日(火)にユーロ圏7月ECB経常収支、22日(金)にユーロ圏9月製造業/サービス業PMIの発表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/11～9/15)の値動き: (対ドル) 安値 1.0632 高値 1.0770 終値 1.0658
(対円) 安値 156.58 高値 158.63 終値 157.61



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2100 ~ 1.2500 180.00 ~ 186.00 円

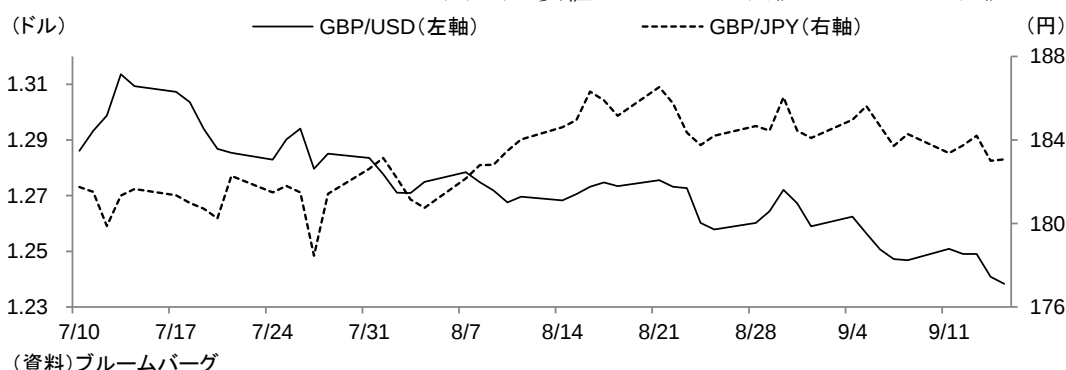
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで続落。特に9月14日の欧州中央銀行(ECB)の会合後に下落ペースが速まっており、ユーロ安・ドル高に巻き込まれた格好だ。ECBの9月会合では+25bpの追加利上げが決定されたものの、GDP見通しの大幅下方修正やフォワードガイダンスの変更もあり「ハト派的利上げ」という印象が強かった。短期金利市場では、9月15日時点でECBの利上げ打ち止め及び来年半ばの利下げ開始が織り込まれつつある。対ユーロで見ると、ポンドはECBの決定当日の14日こそユーロに対して上昇したが、15日にはその上昇分が全て打ち消される格好となった。数か月単位でチャートを見ても、ユーロポンド相場は5月以降の狭いレンジの中に留まっている。景気減速や住宅価格の調整リスクなどを背景に、イングランド銀行(BOE)の利上げ打ち止めも近いという見方が背景にあるだろう。先週1週間に発表された英国の経済指標は総じて弱い内容であり、BOEの追加利上げ期待は一段と後退している。9月12日に発表された労働市場関連統計では、賃金(賞与を除く)の上昇率は7月までの3か月平均で前年同期比+7.8%と、2001年の統計開始以来の高水準を付けた前回と同水準となった。一方、失業率は4.3%と3か月連続で前月の水準を上回った。賃金上昇圧力の根強さを考慮すれば、BOEの追加利上げの可能性は依然として高いと考えられるものの、労働需給の逼迫は緩和しつつあるだろう。また、翌13日に公表された7月のGDPは前月比▲0.5%減少した。7月は雨天がちだったことと、ストライキが多かったことが経済活動の低迷につながった可能性はあるものの、サービス、建設、製造業と幅広い業種がマイナスに落ち込んでいる。

今週1週間のポンド相場は引き続き上値の重い展開だろう。今週は9月20日(水)に8月英CPI、翌21日(木)にBOE金融政策の発表を控える。BOEの利上げ打ち止めという見方が広まれば、ポンドの下押し圧力となるだろう。BOEの9月会合について、みずほ(ロンドン)のエコノミストは25bpの追加利上げを見込んでいるが今回の利上げが最後になると予想している。今会合では、利上げの有無のほかに、利上げ票の数も焦点となる。前回は利上げ8、据え置き1だったが、景気減速や労働需給ひっ迫緩和の兆候が強まっていることを考慮すれば、据え置き票が増える可能性が高い。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/11~9/15)の値動き: (対ドル) 安値 1.2380 高値 1.2548 終値 1.2383
(対円) 安値 182.52 高値 184.39 終値 183.07



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 0.6330 ~ 0.6490 94.00 ~ 96.20 円

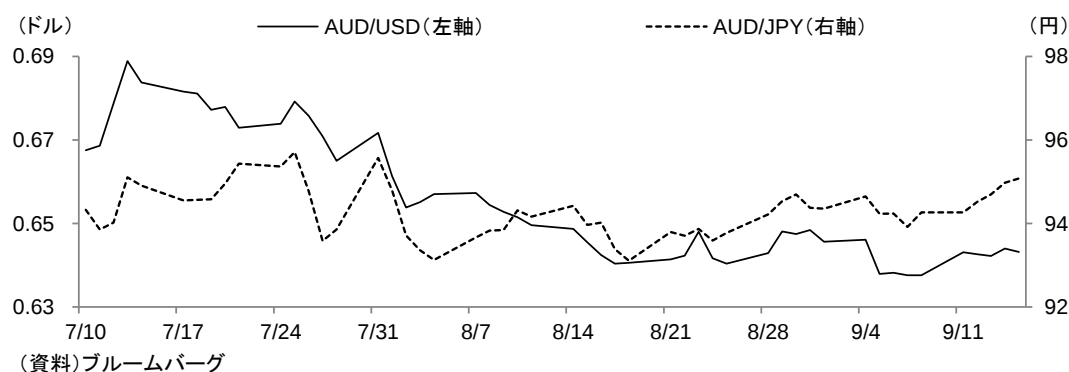
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

9月11日週の豪ドル/ドルは水準を切り上げた。豪ドル/米ドルは週初0.6395近辺で取引を開始、朝方つけた0.6375が週間安値に。前週末に報じられた植田日銀総裁の発言を材料に円が対ドルで上昇すると、ドルは対豪ドルでも下げる展開。その後発表された人民元の中心レートが市場予想よりも元高に発表されると、人民元が対ドルで大きく上昇。豪ドルも連れ高となり、0.6450近辺まで上伸した。12日に入ると、豪9月消費者信頼感指数、豪8月企業景況感指数が強弱入り混じる結果となり、豪ドル/ドルも小動き。なお、サウジアラビアの減産延長を背景に原油価格は10か月ぶりの高値を付けたが、豪ドル相場への影響は限定的だった。13日はアジア時間は小動きだったが、北米時間に入ると米8月消費者物価指数がコアでは事前予想を上回る結果となると利上げ観測の強まりからドル高に傾倒。0.6380近辺まで下落するも、短期的な動きに終始。14日朝方発表された豪8月雇用統計が事前予想を上回る結果となると直後は豪ドル買いとなったが、就業者数拡大の背景が非正規雇用であることが確認されると買い一服。

今週の豪ドル/ドルは上値の重い展開を想定。豪ドルにとっての最大の材料は引き続き人民元の動向となろう。人民元については9月4日週に大きく元安が進んだ後、先週は底打ちを見せた。中国金融政策について見ると、最優遇貸出金利については1年物が8月に利下げ、法廷預金準備率は先月引き下げが発表されている状況。また15日に発表された中国経済指標は中国の景気底入れを示唆する内容であった。引き続き緩和バイアスであることに変わりはないが、今週に追加利下げが講じられる可能性が低いのでは。中国金融緩和なくば、基本的に豪ドルショート目線で臨みたい。逆に緩和策が打ち出された場合は、中国株高から人民元高となり、豪ドルにとって追い風となろう。今週発表予定の経済指標では、19日(火)にRBA議事要旨、20日(水)に中国政策金利、21日(木)にNZ4~6月期GDP、22日(金)に豪9月PMIなどが予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/11~9/15)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。